

### 第三節 大火の席捲、殿閣・邸宅の焼尽、教会・蔵書の被災

#### 一 『世界地震通史』第五〇五項から第五二九項まで

大火の規模と範囲、教会と邸宅の焼尽、王都中心部の絵図、王宮と殿閣の

炎上、蔵書・図書館の焼失、エルセイラ伯爵の蔵書、教会と殿閣の壊滅、

サン・ヴィセンテ・デ・フォア大寺院の倒壊、財富の喪失と経済的損失

大地震と大津波に加えてリスボンでは大火が一週間燃え続けたとされる。地震に伴う火災の被害は、古来日本において甚大である。一七〇三年十一月二三日の元禄地震ではまず桜田の甲府中納言綱吉の屋敷から火の手が昇り、江戸各地での火災は十二月初めまで続いた。とくに十一月二十九日の大火は、本郷、下谷、浅草、深川と類焼し、無縁坂や筋違橋、松平飛騨守・徳川家宣・京極兵部・秋元但馬守等の屋敷、佐山庄左衛門・稲富喜八郎・浅井勘兵衛等の町屋、天現寺・竜泉寺など谷中の寺院二七などを焼き尽した。一八五五年の安政江戸地震については小石川辺、浅草駒形橋辺、永代橋辺など二三面にわたる詳細な焼失図も保存されている。ある住民の証言によれば、「南は芝山下幸橋のうち、西は馬場先八代須河岸小川町、北は本郷池のはた下谷浅草千住に至り、大川の東は本所深河の辺京橋鉄砲洲壺岸嶋まですへては三十余か所とかや、一夜のほとにことごと

く焦土となる。」① 関東大震災や阪神大震災に伴う大火の大惨事はよく知られている。

地震に伴う大火について海外の資料は比較的乏しいが、リスボン大地震と一九〇六年のサン・フランシスコは被害の最たるものであろう。「地震直後の火災による凄惨な被害の典型は、」と地震学者リヒターは叙述する。

「サン・フランシスコと東京の惨事である。言うまでもなく当然人口稠密な地区の危険は、火災が日常的な種々の営みから地震よりもはるかに多く発生することである。消防機関と行政組織はそうした非常事態を覚悟する必要がある。」焼失した建物の数を安政大地震の際三万五千件、関東大震災の際四万七千余件と記しつつ、サン・フランシスコ大地震での火災について彼は言う。「一九〇六年の大地震は一九二三年の関東大震災等に較べれば、それほど激甚ではなかった。しかし、それは地震と火災によって広大な都市の大半を破壊し、四億ドルの損失と七百名の死亡を惹き起した。」火災は三日間続き、その損失額は全体の二割程度とされる。「サンアンドレアンス断層に位置したため、主要な水道管の機能が破壊され、地震の衝撃が都市の給水機能を麻痺させたのである。」②

① 東京大学地震研究所編『日本地震史料 第二巻別巻』東京大学地震研究所、一九八五年。

九五―九七、九八―九九頁。

同書、『第五巻別巻二―』二二三―二五七、五七八―五七九頁。

② Richter, *op.cit.*, pp.382, 477-480-481, 561.

【第五〇五項】 地震と火災はきわめて広大で人口稠密な都市の主要かつ最良の地域を崩壊させ、破壊させた。地震による様々な破壊について述べたあとは、火災による大規模な被害についてまず語ろう。

【第五〇六項】 旧市街の大半と新市街の多くが火災によって灰燼に帰した。火災の被害を受けた範囲を描けば、円周一レグア（約五・五キロ）以上に及ぶであろう。火の手はサン・パウロ教会から始まり、沿海部の広域へ拡がった。円周はこの教会からルモラレス、王宮広場、ナオス河岸、王宮広場、シグード河岸、カエス・デ・サンタレムを経て王の衆にまで到る。そこからサン・ベドロ拱門とサン・ジョアン・ブラサ教会の背後へ登り、サン・ジョルジュ教会へ向った。さらにそこからサント・エロイオ修道院のサン・マルチノ教会正面へと登り、サン・バルソロミウ教会正面まで拡つて、城砦をも脅かす。坂を下って火の手は、アンソルファ門、サン・バトリシオ・コレジオ、サン・マメド教会、城砦海岸へ進み、サン・クリソヴァオ教会の側面と正面を経て、ポラテーム井泉裏手のサン・ジュスタ教会の背後へ達した。王立病院と聖ドミンゴス修道院へも燃え拡つて、ロシオ広場で修道士小路へ転回し、カグヴァル公爵の宮殿を通り、ガリシア街、コンテツサ街、オリビエラ街を経て、三位一体修道院に入り、サン・ロケ教会裏手に登って、ノルテ街、カラサテス街、パロッカ街、アタラヤ街のそれぞれ大半を焼き尽す。さらに改宗者修道院門前のカルカグ・デ・コンプロ街を横切つてジャガ教会を通して、そこからサン・パウロ教会の背後、火の手に描かれた円周の起点へ帰還したのである。

【第五〇七項】 こうした円形のなかでいわゆる河岸地区、ノバ街、ロシオ、そしてレモラレス、アルト・パイロ、リモエイロ、アルファマの諸地域の大半が火災によって完全に壊滅した。これらは首都を構成する十二地区のうちもっとも富裕で人口稠密な七つあたる。火焰に焼き尽くされた王都の広大な部分には総大司教教会、およびサンタ・マリア大寺院（旧リスボン大聖堂）、およびサンタ・マリア・マグダレーナ教会、聖母受胎教会、サン・ジュリアオ教会、殉教者教会、秘蹟教会、サン・ニコラウ教会、サン・マメド教会、サン・バーソロミウ教会、サン・ジュルジュ教会、サン・ジョアン・グ・ブラサ教会の諸教区が完全に含まれる。また、サン・パウロ教会、托身教会、サンタ・ジュスタ教会、サンタ・カタリーナ教会、サン・クリストヴァオ教会の諸教区（これらでは教会も焼失した）、および城砦にあるサンタ・クルズ教会の教区もそうである。

【第五〇八項】 この圏内では豪華な三位一体修道院、カルモ修道院、サン・フランシスコ修道院、アイルランド・ロザリオ修道院、聖霊修道院、ボアホラ修道院、キリスト教団修道院、サン・ドミンゴス修道院、サント・エロイ修道院が、それぞれ豪華で壮麗な教会とともに灰塵に帰した。城砦福利施設、サンタ・マリア・マグダレーナ改宗者修道院、サン・ロレンソ・カルモマリア孤児院も同じように被害を受けた。①

一七三〇年刊行の『都市リスボン細叙』には王都の中心部がつぎのように描かれていた。「王宮はテージョ河畔の首都中枢、王宮広場と呼ばれる地点に位置する。王宮の正面は広場の縦幅全長を占め、端には壮麗な別

館もあって、その横には船舶が錨を降している。」港湾の情景や遙かな海洋が心惹くことは言うまでもない。「王宮の殿閣は壮大であって、きわめて豪華に設備されている。片方は大河に沿い、他方は街路に面する。王宮の一部とされる中庭の周囲には、箱状の建造物が柱廊で支えられている。多数の商人が商易可能な稀有な品々を売り捌く。」近くのロシオ広場一帯も板要の地であって、広大な関税会館など財務や司法に係わる公的機関が連なるとともに、食肉の店舗や小間物屋の拱廊もみられた。異端審問所、ドミニコ会大修道院、総合病院もこの広場に位置する。「総大司教座は」とこの地誌の無署名著者はさらに続ける。「王宮の礼拝堂である。ここは月並な建築と壁面にすぎないが、きわめて広壮である。内陣の祭壇のほか十二の祭壇があつて、いずれも壮麗に飾られている。寶石を鏤めた二段の特別席が設けられ、普通国王と王妃がその席でミサを聴く。日曜と祭日には通常総大司教が司式にあたる。」祭壇では十八人の聖堂参事会員がみな僧帽を被って大司教を補佐し、三十人あまりの聖歌隊がこれに加わる。「これら僧帽の聖堂参事会員は第一級の貴族のなかから選抜される。」司教の地位を授かり、国王から高額の年金を受ける彼らは、「聖務をきわめて厳密に遂行し、自己の威厳を完全に発揮するため、通常駕籠に乗り、徒歩の従者六名を従える。」①

また、フランサ著『啓蒙の都市ーポンプールのリスボン』には深甚な震災を蒙ったバイシャ地区について、中世からの形成過程がつぎのように記述される。低地帯の中核とも言うべき「ロシオの四辻は民衆の広場であり、万聖病院、ドミニコ会修道院、異端審問所、巨大で不粋な構築も建っていた。玄関で囲まれた小さな辻や塔を

① *Description de la ville de Lisbonne, op.cit., pp. 11-12, 14-8.*

鼎立した街角が密集し、狭苦しい道が迷路のように曲りくねり、吐気を催すほどであった。」この地区には要をなすベルリンホ広場と入り混つて、商人通り、金銀細工師通り、鉄格子通りも見出される。「これらの地名は職人や商人を特定の地区に定住させる政策、十四世紀末から王権が正式に実施した政策に呼応するものであった。」また、テージョ河と港湾に近い河岸地区もいち早く開発され、「そこには海運に係わる人々、水先案内人、船大工、香料貿易商などのため、質素な住宅が建設された。とりわけ一五三一年の地震以降こうした新規の人々が新しい地域を求めたのである。三年以内に竣工しなければ、重税を課するとの制約のもとでそれらは大急ぎに施工された。険しい坂が多く、起伏に富む土地であるため、すべての道路がくねくねとし、登り降りするのである。」①

これらリスボン中心部を焼尽した大火の様相がケンドリックの著作ではつぎのように描かれる。「怖るべき火焔は北東の風に煽られ、熾烈に燃え、地震後一週近くも鎮火しなかった。王都中心部の低地帯全域と隣接する丘陵斜面の大半を焼き尽した。同時代の証言によれば、火の手は廢墟の数カ所、すなわちカルモ修道院、三位一体修道院、ルリサル侯爵邸、アヴェニード東側アヌンシアーダ広場から昇り、すぐさま大火となつてロシオ広場から河岸へ延焼した。さらにそれは城砦丘陵の西斜面と南斜面へと燃え上り、バイシャ地区の反対側、カルモ山稜からアレクリム街へ、かつまた丘陵頂上の傷病教会にまで進んだ。」「その火焔は」と彼はさらに述べる。「リスボンのもっとも富裕で人口稠密な地域を焦土に変え、そこでは灰燼に帰した家屋の下に数百の遺体が

埋もれる。「都市中心部を焼尽した凄惨さにおいてヨーロッパ史上かつてなかった大火である。」①

【第五〇九項】 サンタ・マリア大寺院では時計塔をはじめ古式で雄大な建造物が地震によって倒壊し、教会の炎上によって礼拝堂、事務所、控室もすべて破壊されたものの、壮麗と讃えられる優美な立像、聖母マリア奇蹟像とその衣装がなんらの傷痕もなく護られた。

【第五一〇項】 豪華なサン・アントニオ教会は聖アントニオその人が往事暮した旧蹟に建立されるが、かつてリスボン分割のとき市参事館であった壮麗な建物とともに、また堂内を飾る沢山の銀細工や豪華な装身具とともに、サンタ・マリア大寺院の教区壊滅の際に焼失した。その裏手にあつて聖歌殿は地震による破壊を受けなかった。人々はそこで驚くべき聖アントニオの奇蹟を目撃した。中心部の礼拝堂ではきわめて炎上が激しく、銀や銅などの祭具まで溶解したのに反し、聖歌殿はそこからやや離れ、地震と火災を免れたため、燈明や多くの装飾に照らされたまま、祭壇の聖アントニオ像は安泰であつた。

【第五一一項】 同じくこの教区で愛徳信心会の教会と建物が炎上し、マグダレーナ教区では孤児院の教会と施設、聖霊礼拝堂から独立したサンタ・アンナ慈愛病院、サン・セバスティアオ教会、聖母受胎教会とキリスト教団修道士コレジオ教会、さらにサン・ジュリアオ教区ではオリヴェイラ古礼拝堂、サン・ニキウオ教区ではバルマ礼拝堂、ヴィクト礼拝堂とその病院、キリスト昇天教会、サン・ジュスタ教区

① Kendrick, *op.cit.*, pp.311-312.

では万聖節王立病院、アンパロ礼拝堂、難病治療病院、慈恵礼拝堂、サン・パソノミュー教区ではサンタ・カテリーナ・コレジオ、托身教区では壮大なイタリア・ロウレト教会、シヤガ教会、アレクリム礼拝堂である。サン・パウロ教区では慈恵礼拝堂、通称では聖体礼拝堂が地震と火災を免れた。

【第五一二項】 焼尽した殿閣を挙げると、第一はリベイラ王宮であつて、マノエル国王によって創建され、引き継ぎフィリップ二世のもとで豪華にされたあと、今世紀に至り贅沢な建造による優美な広い回廊を増築され、先頃きわめて壮麗な王立歌劇場がヨーロッパ諸国で称讃を博し始めていた。ついで孤児院を付設するコルト・レアル宮殿（以前にも大火を蒙つたことがある）、フラガンサ公爵邸（宝物殿とされていた）、アラフォエンス公爵邸、アヴェイラ公爵邸、ヴァレンス・アンジェジャ侯爵邸、フロンテイラ侯爵邸、カスカエス侯爵邸、サン・ティアゴ伯爵邸、リベイラ伯爵邸、キュキュリム伯爵邸、ヴィラ・フォーール伯爵邸、ヴァラグレス伯爵邸、アヴェイラス伯爵邸、アトウギア伯爵邸、ヴェミエイロ||アルバ伯爵邸、バルバセーナ子爵邸。やや遠いがルリサル侯爵邸もこのとき焼尽した。

【第五一三項】 同じく被害を受けたのは王立税関所の大建築、インド商館、測候所、領事館、王立会計院、七商館である。王宮広場、ナオス河岸、コンソラカオ門前の国際市場とその倉庫、王立裁判所法廷、行政評議会、財政評議会、海外評議会、信教評議会、ブラガンサ館、戦時会計総院、将校宿舎、貯蔵倉庫とその広大な事務局、王国・戦争・航海の諸省庁もこれに含まれる。なお、省庁の本部は王宮の敷地であり、それらの文書保管所では無数の蔵書や書類を喪失し、国家と諸機関に多大の損害を与えた。また、ア

ルジュールベのふたつの聖職者懲戒所とトロンコ聖職者懲戒所も同じく炎上した。①

これらリスボンの王宮広場や周辺の建造物は『スペイン・ポルトガル周遊』でも以下のとおり紹介された。「ここでは豪華な建造物が公私にわたりきわめて多い。また、壮麗な広場もいくつかあって、その第一は王宮広場にほかならぬ。一方では大河と田園に望み、他方では王宮をはじめ見事な建物に囲まれた美しい地点である。この広場で火刑の儀式が行なわれた。すなわち、神聖なる異端審問所によって死に値するとされた罪人が処刑された場である。その儀式を国王は窓越しに眺められた。闘牛がみられたのもここである。」王宮からは遙かに海を望み、船舶、人家、修道院、城砦も眺められる。「王室の蔵書もきわめて価値あるものとされ、十五世紀アルフォンソ五世の創意に始まり、年々増補されている。」しかし、イギリス人によって綴られたこの案内書には、イベリア半島での宗教裁判についてやや批判的な筆致が認められる。「ドミニコ会の教会も典雅である。この教会には物珍しい要素がいくつかある。まず大きな門口の上を仰ぐと、聖なる異端審問所の判決で火刑に処せられた人物の名前と肖像が見られる。また、一方には救世主の家系図が、他方には聖ドミニコの家系図がそれぞれ大理石に刻まれている。この修道院の近くに聖なる館、すなわち異端審問の聖地が位置する。広い玄関に美しい噴水があり、大理石の美しい像も配されている。リスボンへ持ち込まれる一切の書物が、ただちに審問所

① *Moreira de Mendonça, op. cit., pp. 127-129.*

に運ばれ、検閲を受けるのである。」①

王宮の形成過程についても以下の通り言う。「十七世紀四半期第二には」と歴史学者フランサは叙述する。「リベイラ王宮が改築され、壮麗になった。国王エマヌエルのもとで建造された建築は、息子ジュアン三世によって変容され、テルジ別館が変則的に片端へ分離された。しかし、後者はより重要な増築を構想したのである。」十八世紀にはこの王宮にさらにふたつの偉観、教会と劇場が付設される。王都の西部には別の広大な王宮が聳えていた。「コルト・レアル王宮はリベイラ王宮についてもっとも重要である。十七世紀四半期第二の作者不詳の絵画にはインドへ出発する聖フランシスコ・ザビエルが描かれ、リスボンの情景としてコルト・レアル王宮の偉観が示されている。」そこには一八五の部屋と二八の広間があった。「カステリア様式の巨大な箱形の建造物であって、横幅は約五〇メートル、四つの正面に各階十一の窓が配されている。両端には大きな突塔がある。しかし、この王宮の獨創性は三七メートルの両翼であって、イタリア風庭園を中央に抱え、河岸に至るのである。両翼の正面には各々九つの窓が配され、テラスを備えている。テージュの眺望はリスボンに不可欠な魅力であり、王宮の建設者はこれを熟知したと思われる。堤防を障壁とする庭園は栄典を行う会場でもあった。」②

① *Rhys, op. cit., pp. 266-268.*

② *França, op. cit., pp. 29-30.*

【第五一四項】 火災によって焼尽したもつとも貴重な品々のなかで、あまたの浩瀚な書籍の喪失が学者には痛恨の極みである。随一とされる王室図書館には貴重な書籍がきわめて多数蔵されていた。そこには英知と度量の発露として国王ジョン・マクシモ五世が、近年の莫大な書物に加えてヨーロッパで渉猟されたあらゆる古書や優れた稿本の複写を納められたのである。

【第五一五項】 ルリサル公爵の広大な四棟の建物は稀覯本や優れた稿本で満たされ、飾られていた。博学のエリセイラ伯爵のもとで始められたのち、それはフランスコ・ザビエル・メネゼス伯爵によって完全なまでに追補され、後者の英知と該博な識見は没後ポルトガルと全ヨーロッパで称讃を博した。

【第五一六項】 サン・ドミンゴ修道院の図書館はふたつの広大な建物から成り、博学なベネディクト修道士フランシスコ・レイタオ・フェレイラの蒐集による多数の稀覯本や稿本を蔵している。ふたりの司書の協力を得てこれらの公刊と増補が実現したのは、マヌエル・ギルヘルム神父の高配による。

【第五一七項】 聖霊修道院にも広範で精選された図書館およびマリアナと呼ばれる別の図書館があり、ドミンゴ・ペレイラ神父によって設けられた後者は、聖母マリアに関する膨大な蔵書として尊重されていた。

【第五一八項】 同じようにカルモ修道院、サン・フランシスコ修道院、三位一体修道院、ポアホラ修道院に蔵される由緒ある優れた書籍も灰塵に帰した。それらと同じくどの豪邸でも貴重な蔵書が焼失した。

【第五一九項】 個人の蔵書も多数失われ、なかでも異端審問官シマオ・ジョゼフ・シルベイロ・ロドのあまた精選された書物が非常に惜しまれる。五人の豪商の邸宅ではフランス語、スペイン語、イタリ

ア語の書物が、またポルトガル書籍商の二五の店舗と邸宅でも大量の優秀な版本が焼失した。

【第五二〇項】 地震によりサント・アンドレ教区教会、サント・カトリーナ教区教会、サン・マルティノ教区教会、サン・ベドロ教区教会、ペーナ教区教会、救援教区教会、サルヴァール教区教会、サン・ティアゴ教区教会が完全に破壊された。また、ドス・アンジョス教会、サン・クリストヴァオ教会、サンタ・クルズ・デ・カステロ教会、サント・エステヴァオ教会、サン・ジョゼフ教会、サン・ロレンソ教会、サンタ・マリナ教会、メルセス教会、サン・トメ教会は多大の被害を受けたが、倒壊には至らなかった。

蔵書の焼失に関する痛恨は、この震災記録のおいてとくに心惹かれる箇所である。歴史家であるモレイラ・デ・メンドンサだれよりも蔵書の価値を知り、その焼失を傷嘆したと感ぜられる。彼が敬愛するエリセイラ家は、またして歴史の嵐に曝されたのである。ルリサル公爵の次男であり、第三代としてエリセイラ伯爵をそぞくしたルイス・デ・メネゼスは、ベドロ二世のもとで大蔵大臣に登用された。コルベールの重商主義を範とする彼は、外国勢力の圧迫のなかで毛織物など自立産業の育成を試みる。しかし、地主貴族の執拗な反抗によって、経済改革は挫折し、彼自身は自殺に追い込まれた。第四代エリセイラ伯爵フランシスコ・ザヴィエル・デ・メネゼスも宮廷の要職を勤めたが、なによりも博学の士として遍くヨーロッパで知られたであった。「エリ

セイラ伯爵はさまざまな学問、「と現代の『ポルトガル歴史事典』にも誌されている。「とくに数学に造詣が深かった。アカデミアでも諸問題に関する弁論と論究において抜群であり、フランス語、イタリア語、スペイン語にも精通していた。ポルトガルでも国外でも彼の参加を希望しない学芸団体はなかった。一六九八年に一般アカデミアが革新されると、二三歳にしてその会長に選出された。さらに一七一七年王宮にポルトガル・アカデミアが王宮に創設されると、その総務兼理事に任せられ、一七二〇年ジュアン五世により設置されたポルトガル王立歴史アカデミアでは五名の理事・校閲者のひとりとなった。学術的な団体と同じく宗教的な会議にも参加し、一七二五年ローマ教皇大使、フォオラオ宛下の公邸で開かれた集会では、世界会議の審査部門を担当して、宗教史、神学、教皇典範に関する該博な識見で称讃を博した。ローマのアルカディア・アカデミアとイギリス王立協会もその会員に彼を迎え入れる。韻文による彼の創作はあらゆる文学的会合が読まれ、絶賛される。」ヨーロッパ各地の貴顕もエリセイラ伯爵に敬意を示した。「アカデミアでなされた彼の称讃演説を、一七二二年四月二九日教皇イノセント十三世は小勅書で祝福された。フランスのルイ十五世は五巻の蔵書目録と二一巻の版画を彼に贈り、稀有な御業としてバリの宮廷を驚かせた。ロシアのアカデミアも優雅な挨拶状を添えて、そこに属する学者の業績十二巻を送り届けた。イタリア、ドイツ、オランダ、フランス、スペインのもつとも著名な哲学者たちも彼との交流を好み、ムラティ、ピアンチミ、クレスシンベニ、デユモンなどが書簡を寄せた。」「ポルトガル歴史事典」によれば、彼の蔵書目録は膨大であるが、現在もルジターナ図書館で確認できる。「エリセイラ家の蔵書はザヴィエル・デ・メネセスに補強されて一層貴重なものとなり、父祖から継承したものを含め、1万5千巻以上であったと推測される。国王直筆のシャルル五世史、ハンガリー国王が所有したあらゆる

草木の天然色植物誌、等々がこの蔵書を比類のないものにした。一七五五年十一月一日の地震で伯爵の邸宅が倒壊し、それに続く火災によって美事な蔵書が灰塵に歸したのである。」① 第四代エリセイラ伯爵は一七四三年に逝去していたが、大火による蔵書の焼尽は国家的な損失であった。

こうした書籍の尊重はポルトガルにおける上からの啓蒙とも係わるように思われる、多くの王侯貴族にとって貴重書の蒐集は高尚な趣味であった。「蒐集家としてジョアン五世は、」とフランカは書く。「リベイラ王宮やマフラヤコインブラに膨大な蔵書を集めた。書籍や稿本を買い求めるため、パリやローマなどの地に代理人を置き、外国の書店が荷造りした。だが、エリセイラ伯爵のような稀有な貴族、王立歴史アカデミーの会員、僧院の修道僧のほかはだれも読まなかった。」美術品や装飾品だけでなく、書籍の「購入と需要においても宮廷は挙って国王に做った。大使として派遣され、外国で暮らした貴族がとくにそうである。なかでもローマ大使であったフォンテス・アブランテス公爵ルイ・ダ・クンハ、さらにはタルカ公爵、エリセイラ家、カダヴァル家、アタライア家は国王にとって模範となり、蒐集家の道へと誘ったのである。」②

【第五二一項】 大きな建造物はすべて深刻な破壊を蒙った。豪華な聖アウグスチヌス会サン・ヴィサンテ参事員教会では穹窿も破壊され、正面を飾る碧玉や寶石の彫像も崩れたが、修道院の被害は軽少であ

① Eiriceira ( D.Franco Xavier de Menezes, 4 Code da ) Portugal Dicionário histórico. online.

② Franca, op.cit., p. 45.

った。慈恵修道院と慈恵礼拝堂では大きな教会、充実した聖器室、修練士の館、麗しく浩瀚な図書館が倒壊した。そこでは蔵書も大きな被害を受け、美しく新しい回廊、さらには鐘楼などの建物も著しく破壊された。同じ修道会のベンハ・フランカ修道院では教会が倒壊し、僧坊と回廊が著しく破壊された。この宗派に属するサント・アンタオ(父)修道院では教会が倒壊し、僧院が破壊された。イエズス会のサン・アンタオ・ドス・パドレス・コレジオでは高貴な教会の穹窿が墜落し、僧院の広い廊下が著しく破壊された。サン・ロケ誓願所サン・ロケ教会では正門が倒壊し、塔などもまた破壊された。コトビア修練院は教会と僧院に被害を受けた。サン・フランシスコ・ザビエル・コレジオ、ナザレス・アロイオス修練院、そのほかイエズス会の建物すべても同じような状況になった。サン・フランシスコ第三修道会のイエズス修道院も教会と僧坊が著しく破壊された。サン・パウロ修道院の崇高な聖体は宝庫に蔵され、損傷を免れた。神慮による破壊は巨大であり、イギリス系のサン・ベドロ・コレジオとサン・パウロ・コレジオへも及んだ。サン・ベドロ・アルカントラ修道院とその教会も瓦解した。カプチン会サント・アントニオ修道院も著しく破壊され、その教会も倒壊した。サン・ベント会エストレラ修道院では教会が全壊した。荘重なサン・ベント修道院、イエズス・ボアモルテ修道院、カルメル会素足アレマエン修道院とそのサン・ジョアン・ネブミユセノ教会は軽少な被害であった。

【第五二二項】 尼僧修道院、サン・チャゴ騎士団修道院とサン・ベント・デ・アヴィス騎士団托身修道院は多大の被害を受けた。サンタ・アンナ修道院では教会および古い僧坊の片側が崩れた。サンタ・クラ修道院では教会と修道場が全壊に近い。望徳修道院でも多くの箇所が破壊された。聖母マリア修道院では外壁に被害を蒙り、サンタ・アポリア修道院も同じ結果である。受胎告知修道院とその教会も多大の被害を受けた。サンタ・モニカ頌歌修道院では教会を別として全壊した。救世主修道院の被害は小さいが、教会が倒壊した。受難修道院も同じ結果である。薔薇修道院とその教会は多くの被害を蒙った。トリナス・モカンボ荘厳修道院も著しく破壊された。しかし、カンボリド施療修道院は損傷を免れた。カルメル会サント・アルベルト修道院は多少被害を受け、カルタエス聖母受胎修道院はかなり損傷した。十字架修道院はほとんど破壊された。ベルナルド会ナザレス修道院は全壊した。

【第五二三項】 アンバール孤児院、保護施設、さらにはおよびサン・クリストヴァオ教区の保護施設、改宗者のための聖霊カルグエス修練所も多大の被害を受けた。

【第五二四項】 サンタ・クルス・デ・カステロ教区ではサン・ミゲル僧院と聖霊僧院、アンジョス教区ではモンテ僧院(サン・アゴステイノ僧院の旧蹟)とイエズス・マリア・ジョゼフ僧院が多大の被害を受けた。同じ結果に至ったのは、サント・エステヴァオ教区では施療教会とその病院、サン・ジョゼフ教区ではサン・ルイズ・ダ・ナカオ・フランザ教会、救援教会教区では保健教会、処罰教会教区では由緒あるサン・ラザロ僧院、托身教会教区では清貧聖職者聖母受胎教会である。①

「総じて教会は非常に麗しく」と『スペイン・ポルトガル周遊』には描写されていた。「大聖堂、ドミニカ教会、ロレント教会、慈悲教会、サン・パウロ教会、サン・ピセンテ教会、サン・ロケ教会がとくに名高い。」アルファマ地区に位置する聖アウグスチヌス会慈恵教会では、貴族や名家の人でなければ、修道院に受け入れない。この教会はきわめて壮麗であつて、ポルトガル随一、ヨーロッパ屈指の聖器室は聖者の金色の遺物で飾られている。また、さらに八フィートほどの高さの麗しい十字架が納められ、金製で非常に重いため、祈祷行列の際運ぶには司祭を補助する三人の男が必要である。十字の端々にはダイヤモンド、ルビー、真珠、サファイヤ、エメラルドなどあらゆる貴重で高価な宝石が鏤めてある。そして、十字の中心には一・五平方インチの水晶の奥に真の十字架が祀られ、祈祷行列の際運ばれて、万人から絶大な崇敬を受ける。」また、反宗教改革を推進し、日本へも福音を伝えたイエズス会は、ポルトガルで強固な基盤を築いていた。「イエズス会士はリスボンで四つの修道院を有する、」と同じくライスは描写する。彼らの本部は聖ロカに因み、壮麗である。教会も広壮であり、典雅に裝飾されている。ここでは聖イグナティウス・ロヨラの生涯が、数幅の絵面に描かれている。彼はこの宗派の創始者で一四九一年（ポルトガルの）ビスカイで生まれた。聖器室も貴重な絵画で飾られている。」①

豪華な教会の壊滅としてシュラデイ著『最後の日ーリスボン大地震における怒り、壊滅、理性』にはサン・ヴィセンテ・デ・フォラ大寺院の事例が詳細に叙述されている。十二世紀にムーア人からの国土奪還を祝して

① *Phvs. op. cit.*, pp. 267-269.

創建されたこの教会は、一五八二年にアルファマ地区北端へ移築された。リスボンの守護神が祀られ、歴代の国王が葬られた聖堂として、地元の住民もとくにここでミサに列するのを願った。「建築家のジュアン・デ・ヘラーとフィリッポ・テルジが」とその建造についてシュラデイは述べる。「イタリア様式的设计を行った。燦然たる白亜の大理石で造られた二階建ての正面、および燈明台を頂点とするふたつの美しい鐘樓を有し、リスボンにおけるもっとも壮大な教会のひとつとされる。内部には単一の身廊に広大な翼廊が配されて、深奥の主要礼拝堂がローマのイエズス会ジェズ教会を想起させ、反宗教改革の雄々しい宗教的情熱を表すため、建築的な能力のすべてが傾注されている。」祭日には高位高官、上級聖職者、外国使節が瀟洒な馬車か、奴隸の担ぐ籠に乗って礼拝に参じるのが常である。「万聖節の日」とシュラデイは考証の成果に構想力を織り合せて復元する。「座席は満ち溢れた。立席は通路と横手の礼拝堂にしかなく、民衆は入口の階段や教会広場を埋め尽す。どの善男善女も一張羅を纏っている。高い祭壇にいる聖職者とその従者は厳肅な儀式に相応しく純白の式服で身を包んだ。前方の座席は貴族階級や各界の有力者のために用意され、土地の名士や貿易商が家族とともにその後に座る。商人や技師はさらに控え目である。「すべての女性がヴェールで顔を覆う。教会の背後には汚い身なりの窮民が屯していた。」堂内には香煙が満ち、高窓から光が射し込む。「いよいよ聖歌隊席でへまよ、この祭日を我らすべてが慶び・〜と入祭文を歌い始めたとき、ここでも聖歌隊が入祭唱を歌い始めた瞬間、嵐に翻弄される小舟のように、聖堂全体が揺れ動いた。ふたつの鐘樓の大きな青銅の鐘が激しく鳴り響き、纏れた組鐘は響するばかりの叫喚のなかに墜落した。燭台は倒れて消え、ステンド・グラスは微塵に砕け、聖者像は台座から転落し、聖職者も信者も錯乱に陥る。木材の落下で十数人が死亡し、円柱、柱頭、拱門などの大理石、

さらには強大な石塊が崩落した。多くは野外へ逃走したが、教会に留まる人たちは動転しつつ神に赦罪を祈った。『黙示録』で警告された最後の日が迫ると感じたからである。野外で祈る人たちの周囲も濛濛たる埃塵に覆われ、闇夜のように暗い。どの家屋も瓦礫に崩れ、亀裂によって道路は沈み、地滑りで路地は消えた。馬車は大破し、挽き馬は苦悶する。リスボンの住民は半狂乱となり、死せる者と瀕死の者のなかを救いもなくさまよった。』①

【第五二五項】 破壊された殿閣はベンボスタ王宮、異端審問所、リスボン市参事館、さらに落成間近な観覧席である。この観覧席は徳高き君主に相応しい建造物であって、広場を引き立てるよう陛下が設計と建造を命じられた。観覧席に釣り合って広場には雄大な建物が連なり、麗しい礼拝堂、閣僚の豪邸、市参事館、市庁舎、聴聞室があった。タボラ侯爵邸、アレグレット侯爵邸、ニザ侯爵邸、タンコス侯爵邸も大きな被害を受けた。ヴァル・デ・レイス伯爵の豪邸もなかに破壊された。ヴィセント伯爵、ソウレ伯爵、ミグエル伯爵、ウンハオ伯爵、ヴィラ・ノヴァ・タ・セルヴェイラ子爵、メスキテラ子爵の豪邸も同様である。

【第五二六項】 モンテイロ邸、ホルテイロ邸、ムルカ邸、ジョゼフ・フェリックス・ダ・クンカ邸、ジョゼフ・デ・メネザス邸、プリンバル・アラソハ邸、ダニス・デ・アルメイダ邸、ジョゼフ・ジョワキム・デ・ミランダ・ヘンリック邸、クリストヴァオ・マヌエルデ・ヴィルヘナ邸、そのほか沢山の豪邸が大きな被害を受けた。激流は石造の堅固な埠頭を越えて、王宮広場の河岸を襲い、ヴェドリア要塞のほぼ正面、税関事務所の倉庫にまで迫った。この地が沈没すると感じて、多くの人々は激流の強大な力に圧倒され、地震で砕かれた石材を集め、防壁を積み上げようと思案する。陸軍大佐のカルロス・メルデル、大尉で技術者のエウゲニオ・ドス・サントス・カルヴァロは国王の指令によって埠頭を調査し、河底の岩石を確認して、沈没の兆候はないと明言した。

【第五二七項】 リスボン郊外では聖ジェロニモ会の有名な修道院とベレム教会、三位一体アルカンタラ解放教会がかなりの被害を受けた。ルツズ教会、キリスト騎士団修道院の一部と付設の精神病院は倒壊。テイヘラスコム天国の門修道院とその教会は全壊した。マリアーノ・デ・カルナードス教会も同じく崩壊。サン・フランシスコ・ザブレガス修道院は教会と僧坊に多くの損傷を蒙る。サント・エロイオ神父会のサン・ベント修道会はほぼ被害を免れた。

【第五二八項】 聖ベルナルド会の壮大なオデイヴェラス僧院は多大の被害を受けた。サン・アゴスチノ修道会参事員シエラス修道院はかなり損傷。カルニード聖母受胎修道院は全壊した。良き救済修道院は被害が軽く、秘蹟修道院も同様である。

【第五二九項】 破壊を免れた巨大な建物は、ベルム王宮の諸建築、ネセシタード宮殿、壮大で豪華な建築である秘蹟オラトリオ会修道院、イタリアアカフチン会およびフランス・カフチン会のそれぞれ修道院

① Shady, *op.cit.*, pp. 13-14.

と教会、橄欖山素足アウグスチヌス会の修道院、ラウライド侯爵の豪邸などである。①

中心部に聳える豪華な殿閣はリスボンにおける施政や交易の歴史そのものであった。焼失した福利施設や国際機関についてフランサは述べている。「地中海を遮断されたあと、中世の航路を一変させる国際交易の中心となったリスボンは、殷富な都として発展し、インドの富で潤う奢侈を享受した。」十六世紀なかばにポルトガルの人文主義者ダミアオ・デ・ゴイスは、独立記念碑の壮麗さを語りつつ、福祉施設や国際商館の見事な建築に注目を促している。「すなわち救貧院の建物(十六世紀に造られた非宗教的救護組織で、今日なお存続している)、万聖病院の建物、外国使節の滞在宿舎(ただし中世風で重苦しい建物)、大麥貯蔵所、税関事務所、インド商館、古文書館など。」②

また、高地帯にたつらなる豪邸は地震の被害を免れたものの、大火の延焼によって多くが灰塵に帰した。「山の手にあたるバルト・アルトには」とこの地区の景観が『都市リスボン細叙』に誌されていた。「起伏に富む坂道が多いものの、より整備された緩やかな大路もある。そこには壮麗な殿閣が連なり、リスボンの邸宅はみな麗しいとだれもが言う。これら最上級の豪邸は美しい切石、なかにはある種の大理石で造られるが、率直に話せば、漆喰で補填してある。そこには高い天井を備えたタイル張りの広壮な部屋があって、絵画や金色の浮彫

① *Moreira de Mendonça, op.cit., pp.133-135.*

② *França, op.cit., p.24.*

で飾られている。また、石灰で造られた素朴な天井もあるが、それらは際立った白さである。普通の家屋は石材、材木、または煉瓦で造られている。また、その内部は肘の高さまで小さなタイルが張られ、これこそ上級階層に共通した装飾であり、室内をきわめて華やかにするのである。岩石の豊富な土地として王都の近郊、とりわけアルカンタラとサム・ベントに沢山の採石業者がいる。木材については国情が異なり、毫も産出されぬので、北方から輸入する樅を余儀なく用いる。」①

こうした大火による財富の損失をケンドリックつぎのように総括する。「王都の物的な富をもっとも甚大に喪失させたのは火災である。さもなければ、それらの多くは地震による被害から護られたとも考えられる。教会や宮殿や豪邸に蔵される絵画、家具、絨毯、食器を火焰はいささかも容赦しなかった。大きな図書館と商店の巨大な倉庫も同様であって、後者における寶石、食器、絹物の損害はまさしく莫大とされる。ノヴァ・ドス・メルカドロス街とコンフェリアア街の貿易商数名は地震の被害を受けた敷地から勢一杯商品を運び出し、王宮広場で救援の投げ売りを始めたが、やがて火の手が広場へ拡がり、それらすべてを焼き尽した。」外国人貿易商については商品の被害総額が一千二百万ポンドと推算され、イギリス人の損失がその三分の二を占める。「ルリサル伯爵の豪邸は火災地域の北に位置したが、邸内の豊かな家財がすべて焼失した。これを調べれば、どんな資産が失われたかが判る。ティシアン、コッレジオ、ルーベンスなど二百点の絵画、一万八千冊の書籍、千点の稿本、国王直筆のシャルル五世史、ハンガリー国王マシアス・フンタデイ(一四四〇―一四九〇)が所有

① *Description de la ville de Lisbonne, op.cit., pp. 8-10.*

したあらゆる草木の天然色植物誌、膨大な家族古文書、東方と新大陸における発見や植民へと導いた地図と海図の大集成などである。王宮は現在の王宮広場では北西角にあったが、そこでは七万冊の書籍が失われたと言われる。ブラガンサ古文書はアントニオ・マリア・コルドソ街奥のブラガンサ公爵邸で焼失し、揺籃期本を含む聖母マリア信仰書の貴重な所蔵はマルモ街とノヴァ・デ・アルマダ街の交差点、大貯蔵庫所横手の礼拝堂で破損された。また、ロシオ広場北東端のドミニカ会修道院では、入念に分類され、公共にも供される美事な図書館が焼尽した。<sup>①</sup>

#### 第四節 人的・物的被害の全容、緊急政策と救援活動

##### ― 『世界地震通史』 第五三〇項から第五五七項まで

震災による死亡数、死者の内訳、破壊された建物、消失した財富、

罹災への緊急政策、食糧確保の措置、リスボン再建の構想、

災害危機管理の先駆、王権と教権による祈祷行列、

<sup>①</sup> Kendrick, *op.cit.*, pp. 56-57.

リスボン大地震による被害の総計、とくに犠牲者の算定には複雑な要因が横たわる。『都市リスボン細叙』によれば、ジュアン五世の統治下、一七二五年頃には「四〇の教区、二万余棟の建物があって、家族は約三万五千、人口は二五万」であった。加えてこの書物にはリスボンに住む黒人について注目すべき記述が含まれる。「とりわけポルトガルでは黒人奴隷を購入できるので、大半の召使は黒人である。一般に彼らは白人の召使よりも好まれる。なぜなら、鉱山へ売り渡される懸念により従順で忠実だからである。」白人の場合には傲慢な者や嘘つきが多い。「女性の黒人奴隷も同じように多く、家庭で仕えるだけでなく、営利的な事業をも手伝う。日々十五スーから十八スーの報酬で彼女らは市中の商店へ派遣され、稼いだ貯えで食物や衣服を買う。この場合奴隷主は彼女らに宿を提供するだけである。建物の清掃や洗浄が役目なので、さして難しい仕事ではない。勤勉に働き、儉約を続けて、彼女らは自由の代償となる金額を数年のうちに積み立てる。」<sup>①</sup>多くの流れ者や脱走兵と同じく、こうした黒人奴隷の所在も不確かであったに違いない。因みにこの時代には人口六七万のロンドン、五六万のバリについてリスボンはヨーロッパ第三の大都市であった。

大地震の翌年オランダで刊行された著者不詳『リスボン歴史物語』では、いくつかの政治的問題が犠牲者の算定を困難にしたと指摘される。「第一の理由はいまだこの都市が人口を一度も正確に数えていないことである。一七四八年まで政府はこの行政部門において無為であった。」教区教会の住民台帳に政府は多く依存するが、「これには十二歳未満の子どもが男女とも含まれていない。かつまた復活祭の告解を怠る者に、この国では破門と

<sup>①</sup> *Description de la ville de Lisbonne, op.cit.*, p. 8.

いう刑罰があるため、大勢の人々がそうした義務を嫌がり、住いを替える。」そして、人口が明確にされない一層深刻な理由は、スペイン、フランス、イギリスなど列強に包囲された国際環境にあると言う。「ポルトガルは極端な過疎化の国であり、今次の新たな減少は隣国の野望を募らせるので、犠牲者の実数を隠すが国益とされる。」①

【第五三〇項】リスボンの地における大地震が人々に与えた衝撃を判断するには、首都を覆った状況について述べる必要がある。著名な建物を列挙するのみでは、各地域の被害を理解させえないからである。市内および近郊で火災を免れた全域を再三私は視察した。それらさまじまな街路や地区で多々考察した結果、火災は王都の三分の一を焼尽し、そうした圏内の大半は狭苦しい街路に四階・五階・六階建の住居を連ね、より人口稠密な地域であったように思われる。また、地震はリスボンの建物の十分の一を倒壊させ、その三分の二を住めなくしたが、三分の一弱はなお居住可能なのである。ただし、大きな修復を必要とする。協議を不要とする所有地はなかった。地震と火災で有名となった王都の状況についてこれが比較的正しい情報である。

【第五三一項】リスボンの地震、火災、津波による死者の数は、正確な数値としては実際に定め難い。

① *Religion historique du tremblement de terre survenu à Lisbonne le premier novembre 1755, La Hay, 1756, pp. 189, 191-2, 194.*

そこでの人口稠密な地区が大半灰塵に帰し、ほかの地区も瓦礫に埋もれ、全市が無人の荒野と化したのを地震の数日後に目撃した人は、惨憺たる光景に驚倒して、住民の大半が死亡したと語った。(ヨーロッパ全土で多くの人士がそのように書き、公にされた。)より控え目に二分の一と言う人もあり、三分の一と述べる人もある。この場合あまり考慮されていないのは、数限りないリスボンの家族が王都近郊の全地域、広範な首都圏の裁判管轄区全四十地区、さらには王国全体のあらゆる都市と街々、ほとんどの村々に避難したことである。多くの住民がリスボンからローマへ、あるいはヨーロッパ諸国のあらゆる大都市へ逃れたとも考えられる。

【第五三二項】こうした省察や情報の欠如のため以後数ヶ月多くの執筆者が死者の数についてかなり不適切で不正確で算定を記した。この地震の被害一覽を初めて書いたジョゼフ・デ・オリヴェイラ・トロヴァオは、正確な情報というよりもむしろ詩的な表現で、七万人が死亡したと述べた(十一頁)。『哀切な劇場』と題する作品の著者は住民の三分の一が絶命したと信じる。アントニオ・デ・サクラメント神父は『激励の慰藉』のなかで一万八千人以上が死んだと語り、この見解が妥当な数値と思われる。『情報と忠実な記述』の著者はリスボン住民の十分の一が死亡したと推定する。(地震直後の執筆であるが、彼は非常に思慮深い。)また、『リスボン壊滅』の著者も死者は住民の八分の一と推算した。

【第五三三項】各教区の司祭に確認を命令され、陛下がどのような算定を下されたか、私は知らない。しかし、膨大な数であったと推測する。この確認は地震後急遽命じられ、動揺する魂でなお集約できたものとして至当である。また、そうして得られた情報は調査の結果というよりも、むしろ対処すべき課題だ

からである。

【第五三四項】 この物語における論点の一つであるから、私も可能なかぎり厳密に調査したいと思う。なぜなら、地震の一週間後にはみな見方を控へ目にし、数ヵ月後には十万人もの死者ではないと強調されたからである。そこで私は確証できる見解を得られる方法を考え始めた。街々に私が出向き、近隣から消えた住民について数ヵ月後どうなったか、まずひとりに尋ねてみる。こうした面倒な調査を始めたが、時間の不足によって続行できなかつた。その代りに私はリスボンのあらゆる街々の情報を集めた。また、別の見地から五人が死亡したとされる教区の司祭を捜した。教会から避難できた沈着な民衆は、死んだ人数がそれより多いと言う。住宅や街路や教会で地震と火災により歿した人々について、私はつぎのように推論する。宗教組織と聖職者団体のすべて、貴族・閣僚の多数の連合、世俗的な同業組合、さらには司法機関と行政機関において消えた人数を確認してみよう。これらすべてについて推算した結果、記帳の仕方に大差はないので、地震の当日倒壊や氾濫や火災に巻き込まれた人数は五千有余かそれよりすくないと考へる。また、治療を受けた無数の負傷者のなかで、病状の悪化により十一月のうちに加えて五千人死亡したことは事実である。この問題をめぐり厳密に算定できるのは以上に尽きる。

【第五三五項】 逝去した聖職者はフランシスコ・サレジオ会修道士二一名、テルシオ会修道士二名、カルメル会修道士十五名、三位一体会神父一六名、伝道師聖ヨハネ聖堂参事会世俗会員七名、聖アウグスチヌス会修道士五名、ホルトガル・ド・ミニニコ会修道士三名、アイルランド会修道士四名、イエズス会士三名、聖カミロ会修道士一名、オラトリオ会修道士四名、慈悲会修道士一名である。

【第五三六項】 ドミニカ会修道士は受胎告知尼僧院において十名、救世主尼僧院において十四名死亡した。フランシスコ会修道士はサンタ・アンヌ尼僧院において五名、カルバリオ尼僧院において二二名、サンタ・クララ尼僧院において六三名歿した。また、聖アウグスチヌス会修道士はサンタ・モニカ尼僧院において八名死亡した。

【第五三七項】 貴族で死亡した男性はアンジェジャ侯爵の子息で総大司教教会総長のフランシスコ・デ・ノロンハ、さらにガスパー・ガルヴァオ・デ・カステロブランコ卿、マノエル・デ・ヴァイコンセロス卿、リスボン異端審問官ヴァレジャオ・マヌエル・デ・タヴォラ、アントニオ・デ・メロ・カステロ、ロック・デ・ソーサ、國務尚書フランシスコ・ルイズ・ダ・クンハ・エ・アタイデ、戦争大臣ペドロ・メロエ・アタイデだけである。なお、スペイン大使のベララゲ伯爵ベルナルド・デ・ロカベツチも駐在する公邸で逝去した。

【第五三八項】 上位貴族の女性ではマリア・ダ・グラサ・カストロ夫人、年長の令嬢とともにルリサル侯爵夫人、ゴンザロ・ザビエル・アルコバ・デ・カルネイロの配偶者アンナ・デ・モスコソ、またロレンコ・デ・アルメイダの未亡人が令嬢とともに死亡した。

【第五三九項】 博学の神父であるオラトリオ会アントニオ・ベレイラ・デ・フィゲイレドに私は依拠している。神父は精密な調査を行って註解を加えた。彼の簡潔な著作はこの災害に関する文献として筆頭

に挙げられる。ラテン語とポルトガル語で併記され、リスボン大地震の被害を世界に伝えたのである。①

死者の数に関するモレイラ・デ・メンドンサの省察は、優れて慎重かつ綿密と感じられるが、『啓蒙の都市ーポンプールのリスボン』の著者フランサはさまざまな資料を総括してつぎのように述べる。地震の頃「リスボンの人口は約二六万人に達していた。比較的正確なこの数値は一七五六年に刊行された著作に誌されている。王都の人口五〇万人としばしば称するが、それを疑って一七四八年イギリス人によって精密な調査がなされ、三〇万人を超えてはいないと言う。この問題には（政治的な思惑が底流にあり）、イギリス政府も同胞による疑義に無関心ではなかった。」では、震災による死者の数値をどのように考えればよいか。「伝えられる死者の数値はきわめて多様である。地震の直後に書かれた文献では七万人とも八万五千人（人口の三分の一）ともされ、ある外国人は実に九万人と誌した。ローマ教皇の大使によれば、四万人に及ぶ人命が喪われた。しかし、当地のフランス人から届いた書簡では一万四千人から一万五千人と見積られている。これはアントニオ・ペレイラ神父の充実した報告やマヌエル・ポルタル神父による記載と符合する。」こう述べて著者フランカは『世界地震通史ーリスボン大地震』に示された算定を高く評価する。「モレイラ・デ・メンドンサみずからはきわめて精密な探求によって様々な資料の記録を訂正し、地震の当日は五千人、十一月中に負傷あるいは病気によって同じく五千人が死亡したとの結論を得た。災厄の直後にポンプールが海外の総督に宛てた通達とこの数値は一致する。」

① *Moreira de Mendonça, op.cit., pp.135-140.*

また、フランカは死者の内訳についても上流階級の人々が比較的少数であったと判断する。「一万人の犠牲者のなかに身分の高い人は八名ほどにすぎず、リスボン駐在スペイン大使、ルリサル侯爵夫人（大火は彼女の邸宅で始まった）、ルミアール侯爵夫人がふくまれる。その理由は明瞭である。高位高官は教会へ行かず、私的な礼拝堂を有し、十一時前にミサを行う慣習はなかった。また、家族によっては冬期を田園で暮し、のちに宮廷へ戻るつもりでいた。国王一家も十月三十一日の夜はベレム宮殿で過し、リベイラ王宮の火災を免れたのである。」他方民衆の多くは万聖節の儀式に参じ、教会へ出掛けた信者は三万人以上とされる。「もっとも多数の死者が発見されたのは」とフランカは述べる。「教会である。四十に及ぶ教区教会のうち十六は流失ないし焼失し、十九は瓦礫の山となり、残りの五つも被害を受けた。ほかに十六の教会が炎上した。」①

【第五十項】 リスボンの地震と火災によって焼尽した建物、不動産、機具、宝石、金貨と銀貨、豊かな態意的なものと私は判断する。そのような算定とは別に、私が行った調査では、かなりの部分がより確かと思われるので、ここに若干の原理を提示して、莫大な損失である路と推算したい。

【第五四一項】 リスボンの寺院で聖なる礼拝に捧げられる富は、いかにしても凌駕できないとすべての民族が告白する。富裕な都市の大半でのこれに劣らない。すべての教会には神への礼拝に供するため、

① *França, op.cit., pp.57-59.*

金銀や貴重な宝石を鑲めた多数の聖杯、十字架、シャンデリア、大燭台、照明、聖器類が蔵され、豪華にも聖櫃の飾り布、祭壇の台座、説教壇の飾りに銀が施されていた。これらの装飾には錦の布地、絹織物、ビロードの刺繍、金の紐やふき飾りが用いられる。大抵は教会の全体に豪華な造作が施されていた。多額の経費をかけて広大な本殿は、麗しい石材で建造され、あまた金の彫刻と一流の絵画に飾られていた。金と銀しか見られず、豪華な装飾を施した総大司教教会には、どれほどの富が蔵されたであろうか。国王ジョアン五世の豪華な趣味の所産すべても同様と考えられる。リスボンの大聖堂、サンタ・マリア大寺院についてもそうである。

【第五四二項】 王宮とその大宝物殿ふたつには精錬された宝玉、黄金、銀が満ち溢れていた。それらはフンソン地方で驚くほど大量に採掘され、ほかでは僅かしか得られないものである。宮殿と宝物殿にももつとも貴重な武器が多数保管されていたのではない。したがって、リスボンが裕福で贅沢な都市であること、すなわち一介の土木技師ですら多くが金や銀や宝石を持ち、絹やビロードの織物、最良の材質の家具を所有することが判れば、裁判官や貴族の殿閣と邸宅で灰塵に帰した財富、すなわち宝石、貨幣、武器、家具を逐一点検する必要はない。

【第五四三項】 焼尽した首都の一部がもつとも富裕な地域であることを重視すべきである。なぜなら、そこにはきわめて多くの教会と殿閣、さらにはそれらの君長が鎮座するだけでなく、ポルトガル商人の大半や実業家の全員が住むからである。同じく留意したいのは、この地域にふたつの目抜き通り、金座と銀座があり、四つの広い道路を毛織物や絹織物の商人が拠点とすることである。また、市中を練り歩き、極

上の装飾品を売り捌く商人で殿閣の中庭は混み合っていた。リスボンの三つの中心地では小間物屋や食品問屋が軒を連ね、工芸ギルド街はもつとも豊かな階層をつねに呼び寄せた。

【第五四四項】 王立税関所、インド商館、タバコ栽培園、商工会議所で焼尽した財産は、算定し難い。これらの建造物はきわめて広壮であり、人口稠密な首都に満ち溢れるあらゆる種類の財貨でつねに一杯であった。外国人が多くの財貨を有し、大きな邸宅を借りていたことも、留意すべきである。

【第五四五項】 かつまた、火災によりいかに多くが焼失したかを省察し、リスボンの富がいかに無限であったかを考えてほしい。数多のポルトガル人が歿した。王国も共同体も商業都市もこの火災によって消えた。①

フランカ著『啓蒙の都市ーボンバルのリスボン』でも地震、津波、火災による被害がつぎのように総括される。「六つの病院のうち火災も免れたものは皆無である。王国きつての名家三三が地震または火災によって豪邸を破壊された。」たとえば、ブラガンス家、カダヴァル公爵家、ラフォエス公爵家、アヴェイロ公爵家、さらには蔵書でも著名なルリサル・エリセイラ家などである。「そうした邸宅は際立つ構築ではないが、きわめて高価な絵画、家具、絨毯の蒐集を大抵は蔵している。それらすべてが消失した。しかし、最大の損害は王室であつて、リベイラ王宮、総大司教教会、歌劇場が壊滅したのである。ジュアン五世とジョセフ一世の献身的配慮

によって達成された建築と装飾の総体は、部分的に地震には耐えたが、それも大火に焼き尽された。その巨大な財富、絵画や聖器の集成、七万巻もの王室蔵書、インド倉庫に保管された宝石類もすべて消え失せた。」中心部で住宅の三分の一は地震に耐えたが、それらも火の手に包まれる。「たとえば金座通り・銀座通りのように低地帯でも大抵の街路は通行できたが、ほどなく火焔に襲われ、狭隘な道路に密集四階建て、五階建ての木造家屋が容易に標的となった。私たちの調査によれば、王都に存在した二万戸の住宅のうち、大火のあと危険なく住めるのは三〇〇戸と推算される。」<sup>①</sup>

在留外国人の経済的損失も甚大であった。とりわけポルトガル経済を牛耳ったイギリス資本についてペイス著『神の怒り―一七五五年リスボン大地震』は詳細である。「イギリス人貿易商の被害の全容が次第に明らかとなった。彼らの商舗のいくつかは五万ポンドから八万ポンドの商品や債務を失ったとされる。〈神の配慮による一撃によってどれほど家族が打ちのめされ、どれほど商売が攪乱されたことか〉と、ヴィルトシェアーの織物商、ジョージ・ヴァンセイは日記に誌す。」貿易商協会の理事である彼の弟も、二万三千ポンドの負債を背負って倒産した。

さらにパーミンガムの有力な銃製造業者、ファーマー・ガルトン社も大きな打撃を受け、経営陣の刷新を余儀なくされる。この企業はイギリス政府に大量のマスカル銃を調達するとともに、奴隷貿易に係って西アフリカや北米で銃を売り捌いていた。リスボンに設けた支店を足がかりに投資にも手を染めており、挫折の事由の

① Franca, *op.cit.*, p.59.

ひとつは、頼みとするポルトガルの大手金融業者、サム・モンタイグートの被災と倒産である。<sup>①</sup>

【第五四六項】 国王陛下は熱意ある行動的な國務尚書、セバステイアオ・ジョセフ・カルヴァリヨに補佐され、国民の救済、安定、保護とリスボンの輝かしい復興のため、緊急政策を發令された。すべてが的確な決意、賢明な措置、神聖な法令であった。

【第五四七項】 早くも十一月一日リスボン参事会会頭アレグレト侯爵は、壊滅した王都を救うため周到な用意を調べ、軍隊、人材、通貨および王立貯蔵所を宰相の権限によって役立てるよう迅速に指令された。これこそ国王陛下の仁愛を示す不朽の証左であり、わが宮廷の信義と学藝である。やがて参事会の対策本部をリベイラ河岸と王宮広場のニカ所に設け、火災を免れた市民や水路で辿り着いた人々へ、大部隊の支援のもとに食料を分配するよう決定された。(各地区の責任者がこれを点検することも命じられた。) また、陸路で来た人々にも混乱なく分配できるよう、対策本部が食料を王都の入口に用意することも指示

① Paice, *op.cit.*, pp.58, 126, 178-179.

David Williams, James Farmer and Samuel Galton, the reality of Gun Making for the Board of Ordnance in

the Mid-18th Century, in *Arms & Armour*, Volume 7, No.2, 2010. p.125, 128-129.

された。こうした分配の実情を審査するため、審議官にはニクラウ・ルイズ・グ・シルバとアントニオ・ロドリゲス・デ・レオンが起用された。これらの方々は多大の熱意と尽力をもって行動され、リスボン市民救援のため食糧の確保にも奔走された。国王陛下もあらゆる王室の特権と裁可の権限を、市門へ出荷される食料品すべて、さらにはベレムのサンタレム河岸で取引される魚介類すべてに適用し、翌年一月までそうした裁量を継続するよう命じられた。震災直後の数日とくに懸念された飢餓が、この賢明な措置によって完全に防止された。

【第五四八項】 まもなくエヴォオラの竜騎兵隊とベニツシュ、エルヴァス、オリヴェンサの各歩兵隊が王宮へ招集され、近衛兵隊の四分の一がベレム、カンボリド、コロヴィア、カンボ・サンタ・アンア、カマルガル・グ・グラサ、さらに（ロシオ）四辻に駐屯し、主要な街路の管理にあたった。彼らの駐屯をアテナーゼジョ地域連隊が引き継ぎ、竜騎兵隊は数ヶ月以内に本来の部署に戻るよう定めじられた。こうした必要に応じて応急の兵舎が木材で建造された。

【第五四九項】 神を畏れず大規模で多様な掠奪が王都で頻発するとの報告がなされたので、流れ者を取り調べるとともに、疑わしいと思われる人物、リスボン大審院長（ラフォエス公爵の通行許可証を携えぬ人物を検束し、莫大な盗品をリスボンで差し押さえるよう、同じく國務尚書とおし司法官に命じられた。また、同公爵は閣僚の手勢となる司法官と法学士を任命され、王都十二地区の監査官のもとで両者の連携を確立するよう指示された。すべて掠奪の容疑者を簡略な調査によって起訴すること、またレデドール公爵に任命された裁判官が、事実自体の確認と原告自身の陳述に基づいて判決を下し、特例として迅速に即日容赦なく処刑すよう、十一月四日の勅令で命ぜられた。この勅令によって大勢の罪人が死刑を宣告され、数カ所に設けられた絞首台で処刑された。おぞましくも彼らの遺体は数日間絞首台の脇に曝されたのである。懲役に処せられ、瓦礫の除去を命じられた罪人も多い。掠奪という人災がこれによって根絶された。

【第五五〇項】 だれもが飢渴しており、種々の食料品が高騰した。用務も急増する反面、人手が減ったため、法外な賃金も要求された。国王陛下は勅令を発せられ、すべての食料品を十月末の価格で販売すること、いかなる仕事や労働者であろうと、通例以上の賃金を与えてはならぬこと、かつまた違反者には刑罰として瓦礫の除去を科することを命じられた。①

独裁的なジョアン五世のあとを継いだジョゼ一世は、国事にさしたる熱意を示さず、宮廷の要人とくにカルヴァリョ・イ・メロ、後のポンバル公爵に国政の実権を委ねていた。郷土の子として生まれたポンバルはロンドンとウィーンで使節を勤めた後、摂政マリア・アンナ王太后の恩顧により一七四九年國務尚書、外務・戦争大臣に登用された。外務・軍事担当の閣僚でもある彼は、事実上宰相の役割を担い、地震の直前にはイギリ

スの経済的圧力を排除する政策に着手していた。離宮近くの仮設御所に避難した国王のもとへ急遽駆けつけたカルヴァリヨについては、ケンドリックの著作を参照する。「有名な話であるが、不運にも若き国王（ジョゼは三六歳であった）が大惨事の怖るべき様相を聞いて動揺し、どうすべきか必死に問い求めたとき、「死せるものを埋葬し、生けるものに糧を与えよ！」とカルヴァリヨは応答した。」この寸言は別人が発したとの説もあるが、「類似した言葉を彼が語ったこと、ただちに実行すべき有効な方策を簡潔に表現したことは蓋然性も高く、情緒的で頼りない人の揺れ動く気持を、行動的な人物が直截な良識で一举に突き破る古典的な範例として、まさしく不滅である。」ただちにボンバルの主導によって緊急措置が立案され、国王の命令として実施された。「国王陛下の名で書かれ、命じられ、行なわれたすべのこと、すなわち死者を埋葬し、徳義を回復し、食糧を集積し、軍隊を招集し、掠奪を摘発し、アフリカの海賊への防禦を配し、流出者の防止と規制に努め、軍隊へ厳格な訓練を維持し、修道女を保護し、神の怒りを周知させ、国王の一身を護り、反逆者を罰し、イエズス会士を抑圧し、商業を再生させ、技芸を奨励し、瓦礫を除去し、王都を再建することが、大半はボンバルの先見と英知と権威によるとされる。」①

なお、カルヴァリヨ・イ・メロが実際にポムバル公爵と呼ばれるのは、爵位を授けられた一六七九年降であるが、多くの類書と同じく本稿も多くはカルヴァリヨと表記し、必要に応じてポムバル（侯爵）なる敬称を用いる。

① Kendrick, *op.cit.*, pp.72, 75.

大地震における危機管理としてポルトガル王権が発した『緊急政策』は、十四項目に及ぶが、第一項遺体の除去に続いて食糧の確保が「第二項 飢餓への恐怖の除去」と題して指令された。「死せる者の埋葬を適切に行った聖職者は、遅滞なく生ける者の救助という愛徳を実践されたい。なぜなら、多くの艱苦を潜り抜けながら、生きる氣力を喪失した人々は、かかる錯乱と惨状のなかでかならず飢餓に苦しむからである。憐憫の情と済民の心をいささかも惜しむことなく、国王は賢明で迅速な王命によってこれを実施される。国外からの食料品を受領するため、また貧民が糊口を凌ぐのに市会議員の推挙を必要とせぬよう、それらの納人と分配を公正にするため、首都の要職を補佐する議員をただちに任命することを枢密院議長侯爵には指示する。／こうした目的のため法令が発せられ、震災前の価格を変えずに、日々の食糧を民衆に供する特例が定められる。なおまた、主要政策の要請に従って、王命によりすべての魚介類が免税とされるだけでなく、簡便な運搬手段と迅速な指示によって食糧を調達し、四散した民衆に便利な場を販売所としてあらゆる必需品を供するよう、各地に多数の貴族が派遣される。／しかしながら、王国の害虫、独占で利する輩をつねに充分警戒し、民衆を邪悪で横暴な商売のもとに呻吟させ、暴利で耐え難くさせるのを陛下が聞き及ばれたときは、当然の処罰として重罪を科し、見せしめの矯正を行うほかない。／飢餓を防ぐだけでなく、食糧の急騰もなく、生活がただちに正常に維持できるよう、必要と見込まれる以上を用意すべきことがさらに政策で指示される。この政策に従わず、自己の宝庫を開けて、飢えた人を救済しなければ、国王陛下の深厚なる憐憫に應えてはいない。それゆえ、陛下の慈愛と偉大な人格に相応しい雅量によって、きわめて大量の多種多様な支援物資を多くの人々へ確実に分配するよう命じられた。控えめではあっても、陛下の偉大な魂についてありのままに語らざるをえない。／王室の

徳行は活きた法規として、臣民がつねに従うべきものであり、神聖な模範として直ちに見習われる。したがって、貧しからぬ人々におかれては、飢えた罹災者に邸宅と倉庫を開放し、避難所と食糧を提供されたい。また、必要とされるのが明らかな場合には、家財を与えないまでも、貸すことを留意し、実行されたい。／宗教団体の愛徳がとくに顕著であり、力能と徳操において傑出することを、彼らの榮譽として感謝しつつ記録したい。われらが確かに知りえたところでは、貧民へ奉仕するため自己の衣食を節約するよう指示されたのである。そして、かくも神聖な営みとして必要な食糧を節約することに、全員が喜びを感じたと言う。／結論的には原始キリスト教のよき時代が今日なお根づいている。じかに神の手からかくも優しく授けられる寛厚で熱烈な愛徳はそこに発すると思われる。」①

こうした緊急政策の成果についてひとりの在留イギリス人は、『ジェントルマン・マガジン』同年十二月号に無署名の証言を寄せている。「十一月四日国王は勅令を発せられ、軍人が王都のすべての街道に駐屯し、無人化した住居での掠奪を阻止するよう、また家主が自己の住居を死守するよう命じられました。外に出ると、だれもが尋問を受け、厳しく点検されます。隣国へ脱出しようとするすべての人、とりわけ労働者や技術者を引き留めるために、騎兵隊と竜騎兵が道路で見張るのです。他人の財貨を盗賊が掠めるのを押さえるや、ただちに告発し、翌日絞首刑に処します。そのため王都の繁華街にいくつか絞首台が設けられました。ついで国王は国民の

① *Memoires des Proviendencias que se derató no Terremoto, que padecio a Corte no anno de 1755.*

Lisbon, 1758, pp. 6-8.

救済に手立てを講じて、穀物、小麦粉、米などを大量に確保されました。これらの多くはイギリスから支援されたものであり、飢餓の怖れがかくして遠ざかるのです。すべて製粉業者が仕事の再開を指示され、新たな食肉店も認可されて、牛や羊が各地から運び込まれます。厳密な点検が済むまで、船舶は差し止めとされ、船長の断言によれば、貿易商か船主でなければ、積荷できません。以前には高く課税されていましたが、現在は鮮魚をも含め、すべての必需品が無税です。」①

二〇〇九年に公刊された論集『一七五五年リスボン地震再訪』には地質学、統計学、建築学、土木工学、構造力学等の専門家八二名が寄稿しているが、ここでの主要な課題のひとつは、災害における危機管理の歴史的検討である。そこに収録された論文「一七五五年リスボン地震と危機管理理念の起源」において、ポルトガルの土木工学者ベターミオ・デ・アルメイダは以下のように論じる。「ポルトガル国王は緊急の対策とリスボン再興を率領する完全な責任と権限をポムバルに授けた。この際の指導力は有名な応答、〈どうすべきか〉に対して死せる者を埋葬し、〈生ける者に糧を与えよう〉として象徴的に伝えられている。」こうした言葉を彼が実際に発したか否かは確かめるすべもないが、アルメイダは直ちに実施された緊急政策をつぎのように列挙する。第一は震災による莫大な遺体の処理である。「伝染病の蔓延を防ぐため、遺体を処理すること。それらを小舟に積み、テージョ河に沈めることが、問題を解決する最善の方策とポムバルは結論した。」その二は罹災者の救護、食糧、住居への配慮である。「生き残った人々の介護、飲食、居住。救急病院が設けられ、リスボンでの飢餓を

① *Gentleman Magazine*, December 1755, pp.561-562.

防ぐため、特殊な方策が採択された。すなわち、国内のあらゆる地方から船舶で食品を運び入れ、同時に物価の統制を敷いたことである。「瓦礫の撤去と仮設住宅の建設もなされた。第三は治安の維持と犯罪の防止である。「軍隊を招集して公共の治安を護り、簡易裁判を設けて掠奪を断ち、家財を復元した。」人心を動揺させる迷信や流言がその四にほかならぬ。「運命論的な恐怖へ導く迷信と予言、ならびに反動的な主張に対する戦い。(たとえば一七五五年大地震の一周年に新たな地震が発生するとの風評が流れ、これを排除する必要があった。)」加えて国際的な物的支援の受け入れや輸入品の課税引き上げも挙げられる。「こうした政策の若干は」と現代の土木工学者アルメイダは評価する。「災害における危機管理および国内保護計画として構想されるものにきわめて類似している。」①

【第五五一項】 ときには住民が非常に高い家賃で住宅を借り、地主も法外な借地料を要求することを、同じく国王陛下は聞き及ばれ、震災後の賃貸契約書をすべて無効にし、裁判所の査定手続なしには土地を賃貸してはならぬ、と十二月三日の法令に定められた。なお、住居に關しても同様の措置が下され、震災以前の家賃から逸脱せず、従来金額をほぼ保持すること、また違反する場合には財産を没収することが警告された。

① A. Betâmio de Almeida, *The 1755 Lisbon Earthquake and the Genesis of the Risk Management concept*. in Luiz A. Mendes-Victor, ed., *The 1755 Lisbon Earthquake: revisited*, 2009, pp.153-154.

【第五五二項】 王都の範囲をアルカンタラ、アルコ・デ・カルバルハオ、カンポリド、クルズ・ドス・カトロ・カミンホス、サンタ・アポロニアなどの市門の内部に限定しつつ、この地域では特別の認可なしに家屋を建ててはならぬと、同じく十二月三日の法令により命じられた。

【第五五三項】 まもなく最高の技術者マヌエル・デ・マイヤにリスボン全地区の設計図を作成することを命じられ、雄大な構想の公表に期待を寄せられた。かくして大きな広場や真直な道路を造るとともに、均等な高さ、六十フィート、五十フィート、三十フィートにして左右対称の調和ある建物を築き、焼尽した王都の再興のためすべてを改革する全体計画が立案される。こうした計画の公表以前に新たな住宅を建てたり、破壊された建築を再建することは、王都のふたつの法令によって禁止され、執行の妨げとなる境界画定がただちに無効とされた。

【第五五四項】 大都會に居住する住む多くの多数が、数日間または数週間離散して近郊に逃れ、ついには国中をさまよったあと、王宮広場、テージョ河畔、サンタ・アンナ緑地、サンタ・クララ緑地、サンタ・バルバラの野などリスボンの主要な草地へ、さらにはあらゆる道路の余地、王都近郊の野原、修道院の裏庭へ辿りつき、そこに木材で仮小屋や仕切りを設けた。震災直後六カ月の間に九千以上の仮設小屋が構築される。その後なされた小屋の建造や改築は、礼拝用の十字架を二千個も三千個も祀るためもあり、そうした住いに要する日用品の供給と同じく、信じ難いほどの出費と遅滞できぬ多大の労力によって達成された。

【第五五五項】 同じく特筆すべきは、一年余りの期間に千戸以上の住居が再建されたことである。(六

千クルザードを多少超える経費であった。また、近郊にも多数の住居が新築された。この莫大な経費に居住可能な全家屋の修復費を加えると、震災後王都の事業に要した金額は五千クルザード以上と算定される。

① 王都復興の計画と実現はそれ自体大きな研究課題であって、歴史家フランサは名著『啓蒙の都市ーポンバルのリスボン』の大半を壮大な事業の把握と分析に当てている。ここではそうした研究の一端を紹介するに止める。「一七五五年十二月四日ポルトガル王国首席技術官マヌエル・ダ・マイヤ中尉は、」とフランサは叙述する。「国王の従弟、大審院長ラフォエス公爵に、リスボン再建の諸問題を研究した膨大な論考の第一部を提出した。三千語以上に及ぶ文書であったが、さらにマイヤは一七五六年の二月十六日と三月三十一日に一層長いふたつの文書を提出する。」要塞の建設などによって宮廷で絶大な信頼を博する彼も、すでにこのとき八十歳であった。「まさしくマイヤの文書に盛り込まれたのは、都市計画をめぐる所論、建築様式の提案、建物の安全性と街路の衛生を重視した工学上の詳細で斬新な提言である。理路整然とした文書であって、ポンバルのリスボンは多くの原理をここに負うとされる。」第一の文書で周到にも彼が四つの試案をしましたが、その三つは古来の王都を部分的に改造するものであった。「だが、もうひとつの解答をマイヤは考えていた。古い王都は運命に委ね、あらゆる側面において新たな王都を建設せよ、と。」もとより部分的な改造のほうが、無難な事業として

① *Moreira de Mendonça, op.cit., pp.145-147.*

幅広い賛同を得られるであろう。「だが、同時代人を大いに危惧させる構想をマイヤは正当なものとして強調した。第一には古い王都の再建に伴うあらゆる問題が、そうした計画の断行によって解消する。すなわち、建物の現状を調査し、それらの存否を決定し、異議申立てを聴取し、賠償についても検討すること、これらにかならず伴うさまざまな請求に対処する必要性がなくなる。つねに技術者を悩ます残骸の処理に苦勞する必要もないのである。ついでマイヤは真に幸ある土地で新たな都をする喜びを語り、その情熱を周囲に浸透させた。これによって人々は大惨事の危険から解放され、かならず一層幸福になる、と。」①

「リスボンの復興事業はきわめて早く着手された」とさきに挙げた論文でアルメイダは要約する。被災地域の再建は瓦礫の粉砕と除去に始まるが、抜本的な政策と立法化がつぎのように進捗した。「一、王国の主席土木技師マヌエル・ダ・マイヤに王都再建に関する報告書を提出するよう要請された。この報告者は三つの文書から成り、各々が一七五五年十二月四日、一七五六年二月十六日、そして一七五六年三月三十一日の日付となっている。二、将来の紛糾を避けるため被災地区の道路、広場、住宅について調査と登録を行った。また、新たな住宅の建設を禁止し、再建計画に支障をきたす住宅の取り壊しを命じた。三、建築資材、建設工程、人的資源、財政支援、法的措置を総合的かつ数理的に立案し、実施の前提として物価の高騰を抑制した。四、建築家と技術者から成る研究班が復興計画を進展させ、建築構造の安全性、都市としての美観、公衆衛生を充分に考慮した。」こうしてマイヤは都市の建築に関して重要な条件を後世にも認識させた。「都市において建物の高さを制

① *França, op.cit., pp.67-71.*

約せずに、自由な再建を許すのはきわめて危険である。なぜなら、国民は一七五五年の地震の恐怖を忘れ、學術の見地からの規制と予防を考えない。建築の厳しい基準が経済的理由の優先によつて等閑にされる。」「危機管理という統合的な方策を深刻な事件や惨事に適用することは、一七五五年のリスボン地震がヨーロッパ文化に惹き起した数々の変化のひとつと考えられる。この歴史遺産は当時の政治的、哲学的状況とともに地震自体の特殊な様相に由来する。」こうしてこの土木学者はジャン・ジャック・ルソーの言葉をも引用しながら現代の私たちに警告する。「二五〇年を経た現在、一七五五年の事実は危機管理の基本的な道標と受け止めてよい。人類への責任とともに政治的な意志と知見に基づく（理性の）時代が始まったのである。運命論的な倫理から責任という倫理へ世界が転換し始めたとき、危機管理の本質は事件に伴う最悪の事態を想定するところにある。」大惨事に対する現在の見方や対応は、十八世紀とは勿論異なる。しかし、「一七五五年という歴史的な道標を肝に銘ずることは、ポルトガルや世界における大惨事から人類を防禦するため、かならず強い激励となるはずである。」①

【第五六項】 総大司教枢機卿陛下は十一月十一日付教書を国王陛下をとおし通達され、大司教コレジオ、サンタ・マリア大寺院、聖職者団体、各修道会、リスボン市会の参加のもとに同月十六日恩寵を乞う祈禱行列をサンタ・ヨアキム礼拝堂からネセシターデス教会へ実施すること、また今後毎年十一月の第

① Almeida, *op.cit.*, pp.155, 163-164.

二日曜日には聖母マリアの加護を願い、晩課の断食を捧げることを指示された。この祈禱行列には国王陛下、王族の方々、宮廷の全員が参加され、きわめて敬虔かつ献身的に営まれた。

【第五七七項】 十二月十三日同じく総大司教枢機卿陛下の指示により聖職者団体と王都の修道士がみな素足で平伏しつつ、(サン・ロケ教会) サンタ・ヨアキム礼拝堂に集まり、神の慈悲と聖者の加護を懇願して祈禱行列を行った。ラセモニア大司教と総大司教座副司祭に先導されて、この行列では総大司教大寺院の高位聖職者三名、王族の貴人、聖堂参事会員があとに続かれ、市会議員、多くの宮廷貴族や平民も加わって、ネセシターデス教会まで進んだ。そこではローマ教皇大使フィッリペ・アシエオリに補佐されて、オラトリオ会の神父が巡礼者すべての足を洗った。こうした謙抑な所作や多くの高潔な行為が周囲の人々を感涙させ、リスボン住民の模範ともなる。王都のあらゆる修道会と数多の団体も公私にわたる悔悛を示し、敬虔な祈禱行列を営んだ。多くの全般的告解やさまざまな徳高き行為もなされた。ああ、称讃すべき稀有の御業！ ①

国王が参加する祈禱行列の様相については、『都市リスボン細叙』にさきのような叙述がみられる。「祭日の祈禱行列は数年来とりわけ壮麗かつ厳肅に举行され、思うにあらゆるキリスト教国のそれを凌駕する。行列が通過する街路には花や緑が飾られ、軍隊が配備される。」ここでは家屋の棟々に棟深紅の絨毯が敷き、大きなシ

① Moreira de Mendonça, *op.cit.*, pp.147-148.

ヤンデリアと仮祭壇を用意する。また、王宮広場とロシオ広場には凱旋門を模した拱廊と木造の巨大な円柱が建立される。「国王は宮廷の顯臣全員を従えて臨席し、あらゆる修道会の人々、キリスト騎士団等の人々、すべての位階の聖職者、総大司教とその従者がこれに先立ち、僧帽の聖堂参事会員が輝きを添える。」祈禱行列は往きに金座通りを進み、商人通りを経て還る。「行列には多くの民衆も参加するので、先発が戻ってみると、後発はまだ行進を始めていない。」

また、イギリスの神父ジョージ・ホワイトフィールドは、大地震の前年「大齋節の時期に異様な祈禱行列」を観察したこのときとりわけ真剣に取り組まれた理由は、「極端な早魃、地上の一切の果実を枯渇させるほどの早魃」が続くためであった。「大いなる審判の日に備えて、また待ち望む恵みの雨を懇願して、連日一定の期間に修道院から修道院へ祈禱行列がなされている。そのひとつを私は目の当たりにした。かなり大きな行列であった、さまざまな衣装を着たカルメル会修道士、教区の聖職者、修道会の信者から成り、ふたりずつ並んで点火した太く長い蠟燭をみな右手に持っている。」その中央へ九人ほどの肩で聖母マリアの立像が運ばれ、尊い遺物を手にした聖職者が同じく数人に支えられて天蓋の下へ入る。「そのあとには後には修道士たちと数千人の民衆がつづき、〈オーラ・プロ・ノビス〉を唱和する。」同じ頃緋色の聖衣と宝冠で飾られたイエス像が盛大に慈悲修道院から大聖堂へ移される。「翌日の夕刻私が訪れると、」とホワイトフィールドは誌す。「主キリストの像が特大の蠟燭に照らされ、広壮大な大聖堂の高み、祭壇近くに置かれていた。そこには多数の貴族とともにあらゆる身分や地位の人々が参じている。到るところから蠟燭集する彼らは、順々に境内へ入り、礼拝を行うことを門衛から許可されるのである。これらの人々は跪いて主の踵に接吻し、左目と右目で拝したのちに数珠を触れ

る。あとに控える人が数珠を受け取り、順次これが反復された。そうした光景が連続三日繰り返され、その間教会と広場には車馬と人波が溢れ、身動きもならぬほどであった。ここでは音楽がかなり控えめで、礼拝堂は眩しいほど照明されている。第三日の昼前雨が降り、運ばれたときよりも大きな喜びをもって、主の像が盛大な儀式をもって慈悲修道院へ返還された。①

大地震直後総大司教の主宰による祈禱行列が、さらに格段厳肅で悲壮であったことは想像に難くない。「世界地震通史―リスボン大地震」の記述と多少重なるが、これに参加したオラトリオ会アントニオ・ペレイラ・デ・フィゲイレの証言を引用する。「この間枢機卿総大司教は良き牧者の責務を担われた。すなわち、宗教的な儀式を行うべく様々な場所に小屋を建てるよう指図され、いかなる告白をも聴聞する権限をすべての聖職者に与え、聖母マリアを讃える国家的な断食を数日間命じ、神の怒りを鎮めるため公的にも私的にも祈禱を捧げるべく配慮したのである。こうした目的のため十一月十六日日曜日に悩める聖女教会へ全市を挙げて祈禱行列が営まれ、生き残った者の生存を神に感謝した。この儀式には国王陛下もご一家全員とともに臨席される。また、毎年聖母マリアの加護祭において歳々の国家的な断食とともに毎年同じ行事を繰り返すことが、公の誓いとして定められた。さらに十二月十三日金曜日にはほぼすべての宗教品級から成り、数多の貴顕の参加を伴う聖職者集団が、セント・ヨアヒム教会へ集った。そこから前述の悩める聖女教会へかけて緩やかな行進がなされ、素足のまま大地を凝視して、神の慈悲と聖者の調停を声高に哀願し、とりわけ敬虔で感動的な光景を繰り拵げた。

この祈禱行列の先頭としてラセデモン大司教かつリスボン司教座司教総代理のジョゼフ・ダントス・バルボサが素足で歩まれる。このあと同じく謙抑かつ敬虔に、黒衣を纏う貴顕、各宗教品級の方々、それに司教座三位階とされる長老聖職者・高位聖職者・聖堂参事会員が続かれた。悩める聖女教会での祈禱が終ると、オラトリオ会の神父が参詣者の脚を温水で洗い、タオルで拭く。ローマ教皇大使フィリップ・アシアオフスの範に倣い、彼らはこうした行為によってキリスト教の人間愛と献身を示すのである。儀式の刷新が先頃の災厄の記憶を新たにし、頬に涙を溢れさせる。かくも敬虔で恩愛ある光景は、どれほど無情な者でも深い感動なしに眺めることはできなかつた。」①

二〇二二年九月一日 初出

二〇二二年八月六日 更新

【付記】

『世界地震通史』を読解するためには、十八世紀ポルトガル語への習熟と地震学の成果への通曉はもとより、学芸百般にわたる深い素養が必要と感じられる。おそらくこうした事由もあって英訳などヨーロッパ語系の翻訳も見当たらず、残念ながら邦訳もなされていない。すべての要件において非力な筆者が、敢えてここに

① Figueiredo, *op.cit.*, pp.19-20.

試訳を披瀝し、諸賢の叱正を仰ぐ所以である。